

March 29, 2026

十字架の上に マタイ 27:41-44

27:41 同じように祭司長たちも、律法学者たち、長老たちと一緒にイエスを嘲って言った。

27:42 「他人は救ったが、自分は救えない。彼はイスラエルの王だ。今、十字架から降りてもらおう。そうすれば信じよう。

27:43 彼は神に抛り頼んでいる。神のお気に入りなら、今、救い出してもらえ。『わたしは神の子だ』と言っているのだから。」

27:44 イエスと一緒に十字架につけられた強盗たちも、同じようにイエスをののしった。

「十字架のステーション」は次の 14 のステーションから成り立ちます。① イエス、死刑の宣告を受ける。② 十字架を背負わされる。③ 十字架の下に初めて倒れる。④ 母マリヤに出会う。⑤ シモンがイエスの十字架を背負わされる。⑥ ヴェロニカがイエスの顔をぬぐう（伝承による）。⑦ イエス、再び十字架の下に倒れる。⑧ 嘆き悲しむ女性たちを慰める。⑨ 三度十字架の下に倒れる。⑩ 衣服をはがされる。⑪ 十字架につけられる。⑫ 十字架の上で息をひきとる。⑬ 十字架より下ろされる。⑭ 埋葬される。

きょうは、⑩ イエス、衣服をはがされる、⑪ 十字架につけられる、⑫ 十字架の上で息をひきとる、の 3 つのステーションをたどり、イエスの十字架の苦しみが「私のためであった」と確信し、心からの礼拝をささげたいと思います。

第 10 ステーションに向かう前に祈りをささげましょう。「主よ、あなたがかつて歩まれた苦しみと死への道を、私たちは今、たどろうとしています。主よ、私たちと共にいて、あな

たが、私への愛のゆえに成し遂げてくださったみわざを見るものとしてください。主よ、あなたの傷口から私たちに語りかけてください。私たちのたましいを、あなたの愛のお心にまで引き上げてください。」

一、衣服をはがされる

イエスはピラトの官邸からゴルゴタの処刑場までの道を何度も躓き、倒れながら進みました。イエスがあまりに弱っているのを見て、兵士たちは、シモンという名のクレネ人にイエスの代わりに十字架を背負わせました。刑場に着くと兵士たちはイエスを裸にし、着物をくじで分け合いました。

イエスが着物をはがされたのは刑罰の一部でした。それは犯罪人を辱めるためでした。イエスは、ピラトの官邸では緋色のマントと茨の冠をかぶせられ、「ユダヤ人の王さま、ばんざい」といって嘲られ、処刑場では服を脱がされ辱められたのです。罪を犯したアダムとエバをエデンの園から追放されるときでさえ、神は彼らを守るため皮の衣を着せてくださいました。ところが、十字架刑では、犯罪人が身を守るものを身に着けることは一切許されませんでした。犯罪人として死んで行く者に着物は要らないと言って、兵士たちはイエスの着物をくじで分けて自分たちのものにしましたのです。

イエスのご自分の身を守る一切のものを剥ぎ取られ、嘲りと辱めを受けて死んでいかれました。それは私たちの救いのためでした。黙示録 3:17 にこんな言葉があります。「あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、足りないものは何もないと言っているが、実はみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸であることが分かっていない。」私たちには、誰も、プライド

があつて、あのことでは人に劣っても、このことでは人よりも優れていると自分に言い聞かせ、そのプライドで自分を支えようとしています。「プライド」の「上着」や「オーバーコート」をたくさん持っていて、それを着込んでいるのかもしれませんが。しかも、人の前だけでなく、何もかも見通すことのできる神の前でさえも、虚栄の衣を着込んでいることがあるかもしれません。

しかし、それでは本当の自分の姿を知らない「裸の王様」と同じです。私たちが神の前に正直になり、あわれみを求めるとき、神は私たちに「救いの衣を着せ、正義の外套をまといせ、花婿のように栄冠をかぶらせ、花嫁のように宝玉で飾ってください」（イザヤ 61:10）のです。イエスが辱めを甘んじて受けてくださったのは、私たちの罪を赦して義の衣を着せるため、また、罪赦された者を神の子どもとし、それにふさわしい身なりを整え、さらには信じる者たちをご自分の花嫁とし、栄光の冠を与えてくださるためだったのです。

二、十字架につけられる

では、第 11 ステーションに移りましょう。イエスは十字架の上に横たえられ、両手と両足をロープで縛られました。もう、それだけで十字架から降りることなどできないのに、兵士たちは無慈悲にも、その両手、両足に釘を打ち込みました。十字架に架けられると胸が圧迫され、息が苦しくなります。それで息をしようと手に力を入れ、足を踏ん張ると、その釘を打たれた傷口が裂け、そこから少しづつ出血します。十字架にかけられた人は少しづつ血を流しながら徐々に弱くなって死んでゆくのです。十字架刑は、そのように人を苦しませるだけ苦しま

せ、命を奪う残酷なものでした。兵士たちは自分たちが釘を打ち込んでいるお方が誰なのかを考えることもなく、ただいつものように釘を打ち込みました。「カーン、カーン」という金槌の音だけが処刑場に響きわたりました。

それが済むと彼らは十字架を起こし、あらかじめ地面に掘ってあった穴に入れました。十字架は「ドスン」という音を立て穴に突き刺さり、イエスの体も上下に揺れました。イエスの十字架は、二人の犯罪人の十字架の真ん中に立てられました。

イエスをローマ総督に引き渡した祭司長、律法学者、長老たちは、わざわざ処刑場までやってきました。自分たちの企みが成就したのを見届けようとしたのです。そして、イエスを嘲りました。「他人は救ったが、自分は救えない。彼はイスラエルの王だ。今、十字架から降りてもらおう。そうすれば信じよう。彼は神に拠り頼んでいる。神のお気に入りなら、今、救い出してもらえ。『わたしは神の子だ』と言っているのだから。」（42-43 節）イエスが神の子なら、十字架にかかるわけがない。また、奇跡を起こして十字架から降りてこられるはずだ、ということです。彼らは神の御名を使い、聖書の言葉を使って、神の御子を罵り、嘲けるといってんでもない罪を犯しているのです。しかし、そんな彼らのために、イエスは祈られました。「父よ、彼らをお赦してください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。」（ルカ 23:34）。映画

“The Passion of the Christ” に、イエスの祈りを聞いた群衆のひとりが、イエスを口汚くののしるユダヤの指導者に対して、「おい、今のことばを聞いたか。このお方は、あんたのために祈っているんだぜ」と言う場面がありました。イエスは、神の御名を汚し、神の御子を受け入れようとしなかった者のために

も赦しを祈り、その赦しを勝ち取るために、ご自分の命を差し出されたのです。

三、十字架の上で息をひきとる

では、第12ステーションに進みます。イエスが十字架にかけられたのは朝9時でした。正午から午後3時まで、太陽が姿を隠し、暗闇が処刑場を覆いました（マタイ 27:45）。この暗闇は、二つのことを表わしています。一つは、いのちの光がまさに失われようとしていることです。イエスは「いのちの光」、「世の光」です。光であるイエスが、今、まさに死なれようとしており、この世は光を失おうとしていることを表わしているのです。聖書は、私たちが「光よりも闇を愛した」（ヨハネ 3:19）と言っています。闇の子らが光であるイエスを受け入れず、追い出し、死なせ、光を消したのです。光のない世界が闇であるように、イエスのおられない世界は闇です。また、イエスがその内におられない人の心も闇です。その人の人生も暗闇を手探りで歩むようなものになってしまいます。

また、この暗闇は父なる神と御子との交わりが途絶えたことを意味します。イエスは十字架の上で全人類のありとあらゆる罪を背負われ、ご自分が罪となられたので、聖なる神がその御顔を御子から背けなければならなかったのです。イエスは、それまでは、「父よ、彼らをお赦してください」と、神を「父」と呼んでおられました。しかし、この暗闇の中では、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と祈っておられます（マタイ 27:46）。イエスは、その言葉の通り、父なる神から見捨てられたのです。それは、神から見捨てられて当然の私たちが神に受け入れられ、救われるためでした。コ

リント第二 5:21 に「神は、罪を知らない方を私たちのために罪とされました。それは、私たちがこの方において神の義となるためです」とあるとおりです。イエスのこの苦しみによって、その死によって、私たちは、闇から光へと移されました。「闇の子」であった私たちが「光の子」となって、光のうちに歩む幸いを体験しています（エペソ 5:8）。

イエスの十字架に対して、人々は様々な反応をします。残酷なものとして目を背ける人がほとんどでしょう。ある人は、志半ばで殉教したイエスに同情を寄せるかもしれません。ある宗教の人は、「自分たちの教祖は死刑の直前に救われた。だが、イエスは救われることなく、死んでいった。だから、イエスには人を救う力はない」と言います。しかし、私たちは、イエスが十字架から降りられなかったのは、私たちを愛し、私たちの身代わりとなって刑罰を受けるためだったことを知っています。イエスを十字架にとどめたのは、ロープでも釘でもありません。イエスの私たちへの愛だったのです。

これは、ある牧師から聞いた話ですが、その先生がフィリピンの伝道集会で英語で説教し、現地の青年がタガログ語に通訳していました。通訳はとてもスムーズでしたが、その先生が十字架の話をはじめたとたん、ぎこちなくなり、つかえて、沈黙が続きました。先生が、どうしたのかと思い、通訳者のほうをふりかえると、通訳者はイエスの十字架に感動して涙を流していました。先生は言いました。「あの涙はイエスの十字架の最高の通訳でした。」私たちもイエスの十字架を仰ぐとき、言葉を失います。ただ涙を流すだけかもしれません。けれども、それは、ただ悲しみや同情の涙ではありません。「イエスの十字架は私のためだった」との感謝の涙です。イエスは私に義の

衣を着せるためご自分の着物を剥ぎ取られました。私が癒やされるため、頭に茨の傷を、からだ中に鞭の傷を、両手両足に釘の傷を、そして最期には脇腹に槍の傷を受けられました。私が光の子となって、光のうちを歩むため、イエスは暗闇の中で苦しみました。十字架のゆえに、主をあがめ、深い感謝を主にささげましょう。

（祈り）

「主キリスト、あなたを礼拝し、賛美します。あなたは尊い十字架とご死去をもって、世をあがなってくださいました。聖霊なる神よ、十字架に釘づけられた御子の傷を、私の心にするしてください。アーメン。」